

# 教育センター・ニュース

Education Center, Tottori University

NEWSLETTER No.11

第 11 号 2013 年 10 月 1 日発行

## 目 次

- ・全体の活動（新入生学習相談会/ ふれあい朝食会学習相談）----- 1
- ・教育開発部門（第19回大学教育研究フォーラム参加/ 第61回中国・四国地区大学教育研究会参加/  
平成25年度 新任教員FD研修会）----- 1～3
- ・外国語部門（教育改善プロジェクト報告書を刊行/新入生が TOEIC 試験を受験/  
カナダの女性英文学者の講演会開催/ 第 61 回中国・四国地区大学教育研究会参加/ ケニア大使の講義  
に参加）----- 3～4
- ・健康スポーツ部門（スキー実習の実施/ トレーニングルームの使用法説明会開催/  
第61回中国・四国地区大学教育研究会参加/ 学校体育等でのスポーツ事故防止全国会議参加/  
附属学校園への教育支援活動）----- 4～5
- ・関係教員名簿

## 全体の活動

### ● 新入生学習相談会

新入生対象の「学習相談会」を4月4日（木）に終日開設しました。この日は教養科目等の抽選マークシートの提出締切日であり、鳥取地区新入生（1,073名）の24%に相当する261名が相談に訪れました。相談内容は教養科目について（40.6%）、履修表の記入方法について（25.6%）の相談でした。学部別相談者数では医学部（21.5%）工学部（21.4%）が多く、最も少ない農学部（11.3%）の倍近い相談者がありました。



### ● ふれあい朝食会学習相談

4月9日（火）～4月15日（月）に実施された「ふれあい朝食会」では、全期間にわたり「学習相

談コーナー」を開設し、毎朝常時2～3名の教育センター教員が特設ブースに待機し、学生の相談に応じました。相談者は13名、相談件数は12件でした。相談内容は、学習相談に関して3件であり、残りの相談内容は運動部活動や出身県、母校の話など多様な話題でした。



## 教育開発部門の活動

### ● 第19回大学教育研究フォーラム参加

平成25年3月14日（木）～15日（金）に、京都大学吉田キャンパス（京都市・左京区）で行われた第19回大学教育研究フォーラムに参加しました。

第1日目（3月14日）の午前中は、個人発表と小講演でした。個人発表のD-1：FD・授業公

開研究部会では、山梨県立大学・堀井氏らの「相互授業参観」の取り組み、関西大学・實淵氏らのライティングセンター設立による成果報告、芝浦工業大学・榊原氏らの SCOT (Students Consulting on Teaching) 学生を活用した授業改善報告が参考になりました。特に、TA より高度な有給学生指導員である SCOT の育成と活用は興味深い試みですが、本学で導入するには時期尚早と思われます。小講演は東京外語大の田島充士氏の「アクティヴラーニングにおける公共圏他者を「共創的越境」から読み解く」を聴きました。ヴィゴツキー心理言語学に示唆を得た異文化交流モデルから「深い学習」を考察するものでした。

午後のシンポジウム「<学び>を改めて問うー主体的な学びとは何なのかー」は 5 人の報告者によって行われました。東北大学の渡部信一氏は神楽などの伝統芸能の伝承をデジタル画像で分析することで見えてくる学びの自発性に焦点をあて、公立はこだて未来大学の美馬のゆり氏は学生と教員が共働で行うプロジェクト学習の実践事例を報告しました。東京大学の田中智志氏は気づきや一貫性といったオーソドックスな観点から、共栄大学の藤田英典氏は学びの主体性と共同性から、最近の文科省・中教審のコンセプトを批判的にやや後ろ向きに論じました。

最後に、文科省高等教育局の松坂浩史氏が文科省の立場から高等教育政策を説明しました。

第 2 日目 (3 月 15 日) 午前中も個人発表と小講演に参加しました。個人発表では、C-10 : 授業研究部会で、京都大学大学院・大山氏のコースデザインにおいてコンセプトマップを作成してもらう試みの報告と、創価大学・山崎氏の初年次学生への対応を異文化コミュニケーションと捉える方法の実践報告が興味深いものでした。特に、山崎氏の報告は、新入生にとって大学は異文化であり、逆に、教員にとっても新入生は異文化人であるという観点から、彼らにどう対処すべきかのヒントを多く与えてくれました。小講演では、同志社大学・山田和人氏の「PBL の何が学生を成長させるのか」で同志社大学によるプロジェクト科目の実践例報告を聴きました。鳥取大学での全学共通科目において、PBL (Project Based Learning) の手法をどう活用すべきか、今後の検討におけるモデルになるか

も知れないと思いました。

## ● 第 61 回中国・四国地区 大学教育研究会参加

平成 25 年 6 月 8 日 (土) ~6 月 9 日 (日) の二日間にわたって愛媛大学で開催された第 61 回中国・四国地区大学教育研究会に参加しました。

初日 6 月 8 日の午後、開会宣言と挨拶の後、二つのシンポジウムが行われました。シンポジウム第 1 部では、3 大学から事例報告がありました。島根大学の森朋子氏は初年次教育の捉え方とモデル授業の実践例を、山口大学の糸長雅弘氏は平成 25 年度からの共通教育の改変 (例 : ① 全部局出動体制、② 英語のみ必修化等) について、高知大学の石達良氏は 6 科目 12 単位必修の初年次科目のうち 3 科目のアンケート結果について、それぞれ報告されました。シンポジウム第 2 部では、ユニークな教育プログラムの紹介と、受講した学生の発表がなされました。

高知大学の深見公雄氏が昨年より始まった「土佐さきがけプログラム (TSP)」についての講演を行い、その後、高知大学学生の岡林和代氏が TPS プログラムで学んだことと将来への抱負を、松山大学学生の中原正博氏が単位互換で参加した愛媛大学のプログラム「リーダーズ・スクール」体験について、それぞれ報告しました。

2 日目 6 月 9 日の午前中は、各分科会に分かれて、報告とディスカッションが行われました。「人文・社会科学分科会」では、「人文・社会科学分野教養科目における汎用的能力の育成」というテーマの下に、3 件の報告がありました。

最初に、(予定の順番を変更して) 愛媛大学の川口和仁氏が意図的に active learning の要素を取り入れた新設科目群「主題探究型科目」の実践例(「社会参加のための経済学」)を報告し、続いて、本学工学部ものづくり教育実践センター大崎理乃特任教員が、PBL (Project/Program Based Learning) の方法を当センター企画の、文系学生も受講する教養科目に活用した授業実践例を報告しました。

最後に、愛媛大学の榊林建司氏が学生に調べて発表させるワークショップ型授業の実践報告を行いました。

前日のシンポジウムでは、組織や教育プログラムといった、マクロ及びミドルレベルでの取り組みについて、そして、この二日目の分科会

では、マイクロレベルすなわち個々の授業レベルでの具体的な取組みについて、参考となる知見が得られました。

### ● 平成25年度 新任教員FD研修会

6月14日(金)15時より、共通教育棟3階第1会議室において、新任教員FD研修会を実施しました。この研修会に参加された新任教員は、計14名でした(内訳:地域学部3名、医学部4名、工学研究科4名、農学部2名、総合メ基1名)。

はじめに、中島教育担当理事が挨拶し、本学の現状や教員の役割について説明しました。参加者間での自己紹介によるアイスブレイキングの後、本部門の桐山准教授が「FDの意義」と題して、ファカルティ・ディベロップメント(Faculty Development, FD, 教員の能力開発)が義務化されたことや、大学設置基準の改正やこれまでの中教審答申など高等教育をめぐる最近の動きについて説明しました。

続いて、本部門の田畑教授が「教授スキルの基本と授業改善のための工夫」と題して、授業デザインやクラス運営の基本や、アクティブラーニングを学生に促すための授業改善の事例を紹介しました。その後、これら二つのレクチャーに関して、参加者のグループごとにディスカッションの時間を設け、出た意見を代表者に発表してもらいました。

休憩の後、本部門の永松准教授が「自己点検による授業改善:北米の事例」と題して、北米の大学制度、特に、授業についての自己点検や学生や同僚による授業評価、それらの意義や問題点などについて解説しました。

最後に、工学研究科(本部門兼務)の吉野准教授が「専門科目の授業実践と改善例」と題して、専門科目での授業改善の事例を、模擬授業を展開するようなスタイルで具体的に提示し説



明しました。これらのレクチャーに関していくつかの質問が参加者より寄せられました。

研修会終了後、参加者のアンケートによれば、今回の研修会は概ね好評でしたが、文献資料や相談窓口についての要望もありました。今後の改良の参考にしたいと思います。

## 外国語部門の活動

### ● 教育改善プロジェクト報告書を刊行

平成24年度学長経費による教育改善プロジェクト『英語上級における英語教育の実質化』の報告書が3月末に完成し、冊子として刊行されました。このプロジェクトは平成24年度に新しく導入された『英語上級』の4クラスを中心にして、特にTOEIC 500点以上の受講者に対して、様々な教材や教授法を実験的に導入することで英語力の増強を図るとともに、英語上級者に対する今後の教育モデルの構築を目指して企画されたものです。開設された4クラスにおいては、(1)語彙力・構文力、(2)論理的思考力、(3)ライティング力、(4)プレゼンテーション力、などを中心に、質的・量的に充実した講義が展開され、英語教育の実質化に向けて第一歩を踏み出したところです。

### ● 新入生がTOEIC試験を受験

1年生全員を対象とした、第1回TOEIC試験が5月25日(土)に行われました。午前中は工学部、地域学部、午後は農学部、医学部の学生が初めてのTOEIC試験に挑みました。入学してから2か月弱という準備期間で学生達にとっては不安に満ちた受験でしたが、過去の例からも明らかなように、半年後の第2回の受験に向けて貴重な経験になることは間違いありません。TOEICの扱いについては今年大きな変更がありました。300点以下の場合はコミュニケーション英語Bの成績が保留されるという、従来の300点条項が撤廃されました。その代わりに成績の一部として利用されるようになったことです。この変更にはメリットもたくさんありますが、TOEICスコアの低い学生の学習意欲の維持という点ではネックになる可能性もあります。そうした意味でも、今回の受験は12月の2度目の受験結果を占う判断材料にもなり、得点結果の分析が急がれるところです。



## ● カナダの女性英文学者の講演会開催

『グローバル人材育成推進プロジェクト』の一環として男女共同参画推進室との共催で、現在来日中のウォータールー大学(カナダ)教授、トリストラン・コノリー博士(東京大学客員研究員)を招いて、6月7日に講演会を開催しました。開催にあたっては、以前から同教授と知己である本部門の和田綾子准教授が尽力しました。演題は『カナダ文学(英語)への誘い——ポストコロニアル文学批評理論の視点から』で、講演でコノリー博士は、日本ではモンゴメリーの『赤毛のアン』程度しか知られていないカナダ文学を「コロニアル」、「ナショナル」、「ポストコロニアル」に3区分し、多くの作家を取り上げて紹介されました。講演の後、参加した英語関係教員、英語専攻の大学院生、学部生などから、「英語とフランス語を公用語とするカナダ文学の特性とは」、「カナダ作家の独自性は」などといった多くの質問が出され、盛会裏に終了しました。

## ● 第61回中国・四国地区大学教育研究会参加

第61回中国・四国地区大学教育研究会が6月8、9日の両日、愛媛大学において開かれ、外国語(英語)分科会に本部門の福安教授が参加しました。分科会テーマは「共通教育としての英語教育の質保証と成績評価の標準化」で、参加した福安教授からは「愛媛大学英语教育センター」の英語教育改革の現状が報告されました。報告では「単位の実質化の試み」、「評価方法の改善」、「今後の課題」という3項目のもと、「愛媛大学英语教育センター」での取り組み紹介がされました。この取り組みに対しては、参加者から活発な意見交換・質疑応答が行われたそうです。これらの課題はすべて鳥取大学にも共通するものであり、極めて有意義な情報収集の場となったようです。

## ● ケニア大使の講義に参加

グローバル人材育成推進事業の一環である第3回「サミットレクチャー」が6月13日(木)に、ケニア共和国駐日特命全権大使ベンソン・H.O. オグトゥ氏を講師に迎えて開催されました。当日は、1限の「総合英語I」(工学部2年生)の授業を振り替えて、英語担当教員と学生達も参加しました。当初は、少数の聴衆を想定して企画された「サミットレクチャー」ですが、「総合英語I」の授業の振り替えによって、会場をA20講

義室に急遽変更することになりました。結果的には230名以上の聴衆で、ゲストスピーカーも大いに満足されました。講義は英語で行われ、大使のアフリカ訛りの英語に、学生達は困惑しながらも真剣に耳を傾けていました。大使はケニアに関する基本情報を紹介した後、日本およびアジア諸国との関係にも触れて、両者の関係の重要性を強調されました。参加した学生達は、日頃は情報も少なく、特別に関心の無かったケニアに対して興味を覚えるとともに、コミュニケーションツールとしての英語の重要性について再認識していました。

## 健康スポーツ部門の活動

### ● スキー実習の実施

平成25年2月18日~21日の日程で、平成24年度のスキー実習を大山ホワイトリゾートで実施しました。実習には25名の学生が参加しました。昨年と比較すると積雪量が少ない上に雨にも見舞われましたが、けが人もなく全日程を終えることができました。今年も引き続き、クロスカントリーによる雪原散策を行い、ゲレンデスキーとは違ったスキーの魅力を学生に伝えられたのではと思います。



### ● トレーニングルームの使用説明会開催

平成25年度の第1回、第2回のトレーニングルーム使用説明会を5月28日と30日に開催しました。

### ● 第61回中国・四国地区大学教育研究会参加

6月9日に開かれた保健体育分科会では「大学体育における成績評価の現状と課題」というテーマで2大学より研究発表が行われました。

島根大学では教員数の削減により、1クラス100名以上の受講学生の実技クラスが生じるなど、成績評価の以前に、授業の実施に問題点を

抱えている現状が報告されました。

愛媛大学では成績の標準化に向けて共通テキストやワークブックの作成が行われたことにより、教員間の成績評価のばらつきが小さくなると共に、A評価が減少する傾向にあることが報告されました。本学でも GPA に基づいた奨学金給付や留学制度が広まっている現状から、「成績評価のばらつき」について、まず、現状を調査する必要性が窺えました。

### ● 学校体育等でのスポーツ事故防止全国会議参加

7月3日文部科学省主催の「学校体育、運動部活動におけるスポーツ事故防止全国会議」が東京で開催されました。講演等は「学校体育実技指導資料について：石川泰成氏（文部科学省）」「体育活動における頭頸部外傷の傾向と事故防止の留意点：杉本裕氏（日本スポーツ振興センター）」「スポーツにおける頭頸部外傷について：大橋洋輝氏（東京慈恵会医科大学）」「スポーツ事故関係判例からみた事故防止について：望月浩一郎氏（日本スポーツ法学会理事）」の4題が報告されました。石川氏は柔道の安全指導において受け身の修得と並んで相手が受け身をとれる様に引き手を離さないなど技能だけでなく態度、知識などの安全面に係る指導内容の重要性を強調されました。石川氏と大橋氏は運動での頭頸部外傷の実態と予防対策について話されましたが、特に軽く考えがちであった脳震盪の後遺症の危険性についての指摘は衝撃的でありました。望月氏は判例を参考にした事故原因の特定による事故防止対策の策定の重要性を強調されました。会議の冒頭挨拶で述べられた

「朝元気に出かけていった子どもが夕方元気に帰ってくる」毎日を保証することが体育関係者の当然の責務であると強く感じました。

### ● 附属学校園への教育支援活動

キッズスポーツアンドスタディサポート（夏季プログラム）を5月15日～7月3日の計8回24名の児童の参加で、実施しました。実施前後の計測値の比較では、敏捷性に向上が認められました。

指導補助を務めた学生に間でも、「指導者としてのトレーニングになる」など好評でした。



陸上教室は37名の児童の参加を得て5月15日より実施しています。9月18日まで13回実施の予定です。

### 編集後記

2013年4月1日より、教育センター長に藤村工学研究科教授が就任しました。今まで教育センターの一部門でした教職教育部門は、2013年2月5日より「教員養成センター」として、独立しました。

### 教育センター関係教員（○は部門長、\*は併任、兼務教員）

センター長：藤村 薫\*

教育開発部門：○田畑博敏、吉野 公\*、橋本隆司、後藤和雄、井上順子、永松利文、桐山 聡、武田元有

外国語部門：○篠津成一、福安勝則、武田修志、サージャント・トレバー、松本雅弘、和田綾子、小林昌博、  
リン・シャーリー

健康スポーツ部門：○福元和行、上野耕平

※ 外国語部門、健康スポーツ部門、学生生活支援部門、附属学校連携部門の兼務教員は割愛しています。



編集・発行 鳥取大学教育センター広報誌編集委員会 電話：0857-31-6775（内線2485）

E-mail：[st-soumu@adm.tottori-u.ac.jp](mailto:st-soumu@adm.tottori-u.ac.jp)